

琉球の最高神女・聞得大君の神馬について

坂 本 直 乙 子

古来、馬は神の乗りものとして神聖視され、沖縄の祭祀においても神馬は重要な役割を担ってきた。神馬は白馬であることが通説であるが、『琉球國由来記』所収の渡名喜島の神唄に、「マクロムマ」という記載があり、従来これが研究者の間で「真黒馬」と訳されてきた。またその内容から、この神唄が琉球の最高神女・聞得大君の就任儀礼とされる御新下り（オアラオリ）をうたったものと解説される場合もある。最高神女の就任という国家の最大級のハレの行事に、聞得大君は果たして真黒馬に乗ったであろうか、という疑問を抱いた筆者は、日本の祭祀において晴天祈願に白馬を、降雨祈願に黒馬を神に献じる風習があることから、これが降雨祈願の神唄ではなかったか（拙稿「沖縄の祭祀にみる神馬について」と論じた。しかし、「マクロムマ」には、別の解釈が適当であった。

御新下りの行列順序が記されている二つの文書をみると、『聞得大君加那志様御新下日記』では「御馬月毛」、「女官御双紙」では「御馬あし毛」と、神馬が表現されている。「月毛」は通常クリーム色、「あし毛」は白い毛色を表すもので、色の濃淡はあろうが大君の神馬は白馬であり、黒馬ではない。では、どこから真黒馬の解釈がきたのであろうか。マクロ馬の神歌は、雨乞いの祈願からではないかという筆者の説に対し、こ

れは、ツマクロ馬の「ツ」が欠落してマクロ馬となったのではないか、という説を小島瓔禮氏のご提案くださった。確かに、黒く硬い蹄を持つのが特徴といわれる琉球土産の馬は、ツマクロ＝爪黒という呼び名がある。ツマクロという表現は、敬して馬を直接名指ししない心意の表れ、婉曲表現として存在することを考慮すると、なるほど小島氏の説の通り、マクロはツが欠落しているが「爪黒」とも考えられる。したがって、「真黒馬」の字が当てられてきた従来の訳は誤りと考えられ、漢字を当てるならば「爪黒馬」が相応しく、これであれば聞得大君の白馬の神馬を表わす表現として最も適当と思われる。

その聞得大君の神馬にはどのような伝承があるだろうか。戦前の聞き取り調査によると、聞得大君の神馬は知念間切産の白馬で、大君の一生に一度だけ生まれるという伝承があり、知念間切に白馬が生まれると大君の御代替りも噂されたという。また聞得大君御殿の神壇に掛けられていた掛物は、古来弁財天と呼ばれたが、図の中央に女神像、下に白馬、上に白鳥（鳳凰）、白鳥の向って左に御日、右に月が写されていたという。大君の神壇に掲げられていたということは、琉球国における神観念の象徴として描かれた図柄であろう。女神像の下に白馬がいるということに注目したい。なぜ神馬が白馬かということはまた別の議論となろうが、宮中祭祀に白馬節会があるように、白は「吉」色であり邪気を祓うものと認識されているのは理由の一つであろう。『聞得大君御殿并御城御規式之御次第』によると、大君が行う年中行事として一年に五回（一月三日、三月三日、五月五日、九月九日、十二月二十七日）、大御殿の御庭にて神

第15部会

馬を七回引き廻す儀礼があつた。この神馬牽廻の儀礼は、年中行事の重要な節目に行われたと考えられる。

以上、間得大君の神馬について考えると、御新下りの一部には、神馬を神に捧げる儀礼、あるいはその意味の神事が含まれていた可能性は高いと思われる。間得大君が美しく飾られた白馬に乗ることはすなわち「琉球国最高の神の発現」を意味したのではないか。白馬誕生が大君の御代替りを想わせたのは、御新下りに、知念産の生命新たな馬を奉納する風習があつたとも考えられよう。とすると、間得大君の神馬は、御新下り儀礼において神に献じられた靈験あらたかな白馬であり、その使命は、大君とともに琉球国神事に生涯を尽くすことであつた、という見方も可能ではないか。

戦後沖縄の火葬

——那覇若狭町、辻原の墓地整理をめぐって——

加藤 正 春

戦後沖縄の火葬の状況については、米軍統治下の資料が公表されておらず、よくわからない点が多い。一九五六年に刊行された『真和志市誌』に一九五四の火葬率にかかわる関連資料が掲載されており、それから推定される同年の同市の火葬率は約五八％である。真和志市は今日の那覇市域の一部であり、この推定は、当時の那覇市域の火葬率が比較的高かったことを示唆

している。那覇市域では一九四八年二月に戦前の仲毛葬儀社の伝統を継承する那覇葬祭組合が葬祭業をはじめたが、一九五五年二月には沖縄公益社が、火葬葬儀に特化したかのような葬儀社の営業を開始している。これは、当時の那覇市域の火葬率の高さを背景にしたものであろう。

那覇市域の火葬率の高さを導いた要因はいくつものものがあると思われるが、その一つとして、一九五一年から行われた那覇市若狭町、辻原の墓地整理事業をあげることができる。那覇の若狭、辻原の墓地群は沖縄を代表する墓地として戦前から有名であつたが、一九五一年に米軍の軍命を受けて、那覇市都市計画課がその撤去事業を開始したのである。米軍の意図は、両墓地の土を掘削し、その土を用いて泊港護岸の埋立・整備を行うことであつたようである。

事業は、まず墓地所有者の協力を得て、墓内の骨の火葬を行うことからじまった。両墓地の墓の筆数は千七百余筆、実際の墓地数はこれよりも多かったというが、その実数は役所も把握していなかったようである。市は新聞に公告を出して所有者を探し、その所有者たちとの協議のもとに一斉火葬の手順を決定していった。一連の過程は逐次新聞（うるま新報および沖縄タイムス）が報道しているが、それによれば、人々は市役所が指定した日に、自家の墓内の骨をまとめて臨時火葬場（若狭町、辻原にそれぞれ一カ所ずつ設けられた）に運び、そこで市の職員に火葬してもらったようである。その骨灰は市が提供した骨壺にいれ、自家の新墓の用意のない者は、市が設置した臨時納骨場（奥武山世持神社内）に安置したのである。火葬は五